

# ■ハンナ・アレント〈世界への愛〉

その思想と生涯

中山 元〈著〉

先ごろマルガレーテ・フォ  
ン・トロツタ監督による映画  
も公開され、再評価の進むハ  
ンナ・アレント。政治哲学者  
として、またユダヤ人として、  
全体主義との数奇な格闘を余  
儀なくされたアレントの思想  
が、丹念に詳解されていく。

アレントの名著『人間の条  
件』のタイトルは、当初『世  
界への愛』とする予定だった  
という。この逸話を軸に、  
「世界」と「愛」についての  
思想が展開する。アレントの  
世界概念は、歴史性、持続  
性、他者性の三つの特徴をも  
つが、それらは「天としての  
世界の歴史」「地としての大  
地の持続」「装う者としての  
他者」にそれぞれ対応させら  
れないか、と筆者は論じる。  
それらはちょうど、因縁の師  
・ハイデガーが世界の四元と  
呼んだもの——天、地、死す  
べきもの、永遠なるもの——  
と鮮やかに対照する。ハイデ  
ガーにおける他者との関係性  
を象徴する概念は「頹落」で  
あり、大衆社会に埋没するひ

## 世界は他者ととともに作るもの

との様態である。

一方、アレントは他者へと  
向かう能動的なかわりを基  
点として世界を立ち上げる。  
愛の内包する矛盾とは、世界  
や他者とのかわりにおいて  
宿命的に表れる問題でもあ  
る。西欧思想史におけるこの  
問題を指摘しつつ、それでも  
なお、「世界は他者とともに  
作るもの」だという姿勢。そ  
れは、ハイデガーがアレント  
と袂を分かつて後、何度か言  
及しつつも確証し得なかつ  
た、単独性の難問を解く鍵の  
ように見える。

アレントは言う。単独性は  
孤独、孤立、孤絶の三様を持  
つ。孤独とは孤立ではなく、  
自分自身とともにあるとい  
うこと。思考のために孤独は必  
要だ。一方、孤立とは大衆の  
中であって孤独の契機さえ奪  
われていること。さらに仕事  
をしているとき、人間は孤絶  
の状態にあり、自分自身と向  
かい合うことすらできない、  
と。透徹した孤独と、世界へ  
の愛。両者が引き合う場を開  
く、大著である。

評・水無田 気流

詩人・社会学者

新曜社・59805円／なかやま・げん  
49年生まれ。哲学者・翻訳家。著書  
『思考のトポス』『フーコー』など。

